私のなかの歴史

島　マス

灰燼のなかから福祉に生きる

明治 33 年 3 月 13 日生。

大正 8 年沖縄女子師範本科第一部卒。同 8 年 4 月山田小学校訓導をふり出しに同 23 年大洋初等学校退職まで教職 30 年。

昭和 23 年、越来婦人会長・軍政府社会事業課厚生員、26 年沖縄群島政府児童福祉司。

昭和 27 年、胡差児童保護所設立、28 年コザ女子ホーム設立。

昭和 32 年、中部地区郡社協事務局長、41 年沖縄県社協主事他、国際社会事業団理事、県売対協審議員等歴任。現在、中部地区婦人福祉友の会会長、中部地区老ク連副会長等要職多数。

灰燼（かいじん）のなかから福祉に生きる

敗戦・青空教室

それは 1945 年の 7 月 13 日頃だったと思う。苛烈（かれつ）をきわめた沖縄戦は、すでに 6 月 23 日に組織的戦闘は終っていた。沖縄本島北部の久志村(現名護市)の山奥に、子どもたち 4 人をひきつれて避難していた私たちにとっては、戦争は終わっておらず、大砲が私たちのすぐそばに打ち込まれ、親子 6 で山を後にし、瀬嵩（せだけ）という部落にあった米軍の捕虜収容所に入れられた。

かえりみると、私たち家族は、この時すでに二十歳になる長男と、県立一高女にいって、

あの「ひめゆり部隊」に参加していた 18 歳の長女の戦死の親に接していた。だから、残った 4 人の子どもたちを守るのに必死で、敗け戦を知るよしもなく、山にたてこもっていたのである。

その後瀬嵩の収容所を出て私たちは、民家の軒下に、なんとか雨露をしのぐだけの居をかまえることができた。

無蔵（むぞ・あなたの意）や石川村　かや葺きの長屋

我身（わみ）や屋嘉村の砂地枕

という琉歌があるが、当時、ほとんどの人たちは、米軍の野戦用テントを砂地にたてて暮らすのはまだよい方だったのだから、私たちは、幸せな住生活をしていたのである。

８月１日、部落の林の中に集合せよ、とのアメリカ軍政府筋からの指令があっていってみると、学級編成がおこなわれていた。戦前から教員生活をしていた私には、幼稚園と小学校の高等科の家庭科の兼任を指示された。午前・午後の兼務であった。戦後の沖縄では、米軍が軍政を執っていたが、その当時は、わが国の貨幣を廃止してしまったばかりか、通貨を使用せず、給料は米軍の軍用食糧の配給という現物給与だった。教員には米二合が給与としてあたえられたが、私は兼務だったので四合の支給をうけた。

いよいよ浜辺の砂の上や林の中で、机も椅子もない「青空教室」が始まった。8 月 15 日、元の瀬嵩小学校の校庭に集合せよという伝令があったので、児童・生徒を連れていってみた。アメリカ軍の星条旗が、校庭に高だかと掲げられていた。その下に集ったら、日本国天皇は降服した。戦争は日本の敗けだ、アメリカは勝ったのだから、きょうはお祝いだと告げ、お菓子の罐詰（かんづめ）二缶が配られた。なにも知らない子どもたちは、お菓子をもらって大喜びだったが、あちらこちらで嗚咽（おえつ）とすすり泣きの声が聞えた。多くの人びとが肉親を数多く失ない、いいつくせない辛苦（しんく）をなめてきたのであるから･･･。ようやく我れにかえって、私たちは海岸にいき、お菓子の缶を岩にぶつけて、思う存分に泣き崩れた。そうした私たちを、子どもたちは、いつまでもみつめていた。

明けて 1946 年 2 月には、中部の石川市（現うるま市）に移動させられた。ここ石川は敗戦後の政治・経済の発祥地となった土地だけに、住民もカヤ葺きの家が建てられ、教室は米軍のテントが張られていた。教員の辞令も、米軍が布令で組織した行政機構である「沖縄諮詢（しじゅん）委員会」から発令された。この頃は給料が 300Ｂ円（軍票、1Ｂ円は 180 円相当）が払われ、敗戦後はじめて現金支払いの給料を受けたのだった。

厚生員から福祉の道へ

1948 年 8 月、私は長年にわたった教職を退いて、越来村（現沖縄市）に帰った。敗戦後、死をまぬがれた県民、とくに戦災母子の生活は筆舌（ひつぜつ）につくしがたい悲惨なものだった。米軍兵士による強姦（ごうかん）にたいしては、部落中で、薬きょうガラをつるして鐘（かね）にかえ、これを打ち鳴らして防ぐという努力をみんながした。しかし、「食べざかりの子どものために―」と身を売るものもあったし、わずか 10 箱のアメリカたばこの闇（やみ）販売でつかまるものもあった。私は、こうした戦災母子の生活をみて、胸をしめつけられる思いがしていたのであった。

越来村に帰った私は婦人会長に推されたが、母子世帯の相談相手にもなった。当時は、

行政機構も整備されていなかったので、婦人会長には、自然、そうした役割をになうシステムになっていったのである。

ちょうどその時、軍政府に厚生員（現行制度でいえば福祉事務所のケースワーカー）が置かれるようになった。当時の越来村村長にすすめられて、11 月 19 日に米軍政府公衆衛生局社会事業課で辞令を交付され、越来村厚生員となったのである。私は、当時、村内にある困窮世帯の窮状（きゅうじょう）について心を痛めていたが、同時に「乱給漏給（らんきゅうろうきゅう)」の弊害があることに気づいていたし、これを是正する必要があると思っていたので、さっそく実態調査にとりかかることにした。それは、まさに「昼夜兼行」の調査と集計、分析だったと記憶している。

この調査の結果、家族中で 4、5 人もの米軍雇用で、多額の現金収入をえている世帯があるかと思えば、地方では、困窮状態を訴える術（すべ）も知らない戦災母子世帯があった。これらの世帯は文字どおり「食うや食わず」の生活に、なんらの手をさしのべてもらえないという状態だった。まったく、このような「乱給漏給」がおこなわれているのは許されてよいことではなかった。

私は一世帯ごとに詳しい調書を作成し、救済世帯のワクをひろげてもらうよう軍政府に訴えた。軍政府の係官は、私の作成した調書をみて快く聞いてくれたのだった。私は嬉しかった。

豚の沙汰（さた）も米軍しだい□■■■

ら、ミルクをあたえる時間まで、こと細かな注意と指導のため、たいへん長い時間がかかった。

さあ大変。一方の救済係のグリーンという女の人が、カンカンになって怒っている。通訳に聞くと、「私を長時間待ちぼうけをさせておいてなんだ。あなたたちは豚の係か。人間の係ではないのか」といっている、というのである。私たちは、「豚の係だの人の係だのと馬鹿にして―」とばかりに、ヒステリーをおこしているこの婦人係官と論争になった。「軍はララ物資を人間よりも重視して、もしもの時は、“厚生員は刑務所行きだ”とオドシをかけるとは何事か」と反論したが、このヒスは止まらなかった。

戦後、誰知らずうたわれて人びとの口の端にのぼって流行ったものに

片足や沖縄　アメリカや一足

うっちゃきぬまぎさ　抜じんならむ

という琉歌があるが、これはアメリカの無法なやり方のなかで、敗戦者の苦しみ、くやしさに喘（あえ）いでいた日本人である私たち沖縄県人のおかれた位置をよく表現していると、いま苦しかった過去をふりかえって、思い浮かべるのである。

この間に、このこと以外のゴタゴタもあったが、グリーン女史の顔も和（やわ）らいできたので、そこで例の越来村の救済世帯の実態調査を提出して説明したら、定員増を認めた。

当時は生活保護の基礎も低く、しかも現金支給でなく、物資を支給されるだけであったので、7、8 人の子どもをかかえた母子世帯の生活は悲惨だったのだから、定員増になったことは、私にとって天にも昇るほど嬉しいことだった。

保護基準の低さで軍政府と論争□■■■

となった。この年8月からは軍布令で群島政府が組織され、厚生部社会事業課に所属する。この年から急速に、社会事業行政が軌道にのりはじめた。これを契機にして厚生員の資質向上をはかるために、1950 年 12 月に、東京の社会事業研究所に職員 5 名を派遣して福祉主事の資格を取得させることにした。この研修生たちは全社協発行の「生活保護の手引き」を寄贈されたが、この本は、これから 3 年後沖縄で生活保護法が制定されるまで、大切な指導書として、福祉主事の必携となったことは、いまでも忘れることができない。

群島政府が発足し行政機構が次第にととのってきたが、私は 1951 年 3 月 1 日、厚生部社会事業課児童福祉司となった。当時、沖縄では少年の非行が最も大きな社会問題となっていた。とくに「基地の中の街」といわれたコザ市（現沖縄市）では非行児が多かった。

それ以前、非行児は軍裁判所に送られ、刑務所で処置されていだが、これは子どもの将来のためによくないという理由から、子どもの家庭調査をしたうえで、軍裁判所に陳情して、子どもを課程に引きとる仕組みになっていた。

それまで厚生員が非行少年問題にたずさわっていだが、児童福祉司になった私がコザ警察署に配置されて、厚生員が作成した家庭調書などを基礎として、裁判所から子どもたちを引きとるようになった。この子どもたちのなかには家庭に帰るのを拒否するものもあった。さりとて保護、収容する施設もなく、やむなく私の家につれていったりしていた。しかし人員もあまりに増えたので困りはててしまった。主人は家族の分とあわせて子どもたちの食糧を集めるために毎日大奔走しなければならなかったし、家も狭くなってしまった。こうして、なんとかして一時保護所が必要だと痛感した。

1952 年 4 月には「琉球政府」が発足、私はひきつづき厚生局民生課コザ署勤務で、職員も 1 名ふえた。私たち 2 人の取扱う子どもたちの数がふえるので、児童保護所をつくりことにした。主人が北部の大宜味村塩屋から 9 坪の建物を購入、塩屋の篤志家によって運搬から建築までの奉仕をしてもらった。こうして念願の児童保護所が 1952 年 12 月 1 日に落成した。この施設は問題の性格上、長期収容の性格をもっているので運営に困難をきたし、翌年、沖縄県社協の委託事業とし、主人が救護指導員になり、他の職員と計 3 人で運営にあたった。後日、児童福祉法の制度によって、これは中央児童相談所にひきついだ。

12 月の寒い晩のこと、某（ぼう）新聞記者が酔いつぶれた 6 歳の幼児をかかえて保護を願いにきた。記者の話によれば、このN君の母親は米人相手の売春婦で、N君を 1 人置き去りにして特飲街（とくいんがい）に出かけたのであった。1 人残されたN君は、おなかが空いたので、母親が飲んでいたウィスキーをそれと知らずにコンコンと飲んで酔いつぶれ、道路の真中に寝ていたという。あまりにもむごい仕打ちに腹がたった私だったが、子どもの虐待事件はますます増える一方である。私は、このN君に温かい愛情をそそぐのは今だ、と思い、一枚きりのフトンに抱いて寝かせた。N君は一晩中もどしたり下痢したりで、一枚きりのフトンは洗ったので、フトンなしの夜を明かしたのだった。翌朝酔いのさめたN君はニコニコし、大きな声で「赤いソテツの大島育ち」をアッケラカンと歌ってみんなを笑わせた。これがまた、私の怒りと涙をさそうのだった。N君を一ヵ月後に養護施設に送るまで、母親の姿は見えなかった。

コザ女子ホームを設置□■■■

の処置が問題になった。男子のばあいは救護施設や養護施設に分類措置されるが、女子の救護施設がなくて困り、その必要性を痛感した。これについては、かねてから米国民政府厚生局にいた山崎亨一さんからの要望もあった関係上、コザ市内の中央病院跡のコンセット（米軍の野戦用カマボコ型兵舎）が沖縄実務学園（救護院）に払い下げになったのでそのうちの一棟をもらいうけることができた。私たち夫婦の所有になる土地にそれを建てることにしたが、山崎さんの尽力で集めた資金と、知人から借金した私たちの資金を注ぎ込んだ。内部設備や更生指導に必要な備品集めには、コザ市内の篤志家、学校やアメリカのボランティア団体に訴えた。こうした協力によって、多年の念願だったコザ女子ホームは、1953 年 7 月 13 日に完成、開所した。落成式の費用がなくて困ったが、砂糖とコーヒー袋を自らの車に乗せて、「これだけは私にさせて欲しい」と、当時の政府の厚生局長がいわれた言葉は、一生忘れることができない。

この施設は数多くの人びとの愛情こもった応援でできた施設で、更生指導のボランティアの先生方も一流で、英語、国語、算数、洋・和裁、手芸、舞踊と一日の日課もキチンとセットされ、少女たちはみっちりと学習することができた。温かいボランティアの協力により、少女たちも明るくなった。私たち夫婦も寝食を共にしていたから、いつしか「お父さん、お母さん」と呼ばれるようになり、この施設は、施設というよりも大家族といったほうが適切であった。

ある日の昼下がり、児童係が色の黒い小さいＳ子さんをつれてホームに来た。顔ははれあがって紫色の斑（はん）点があちこちにあり、目はおどおどし、口も開かない。調書によれば孤児で、毎日叔父から折檻（せっかん）される虐待児とのこと。まず始めに寝小便から治そうと思いＳ子と床を一つにしたら、毎晩オシッコをかけられたが、この夜尿症が治るまでは三ヶ月間つづけた。朝起きる毎に友達が、やれ寝小便したとさわぐので、夜中にパンツを換えてあげたらさわがなくなったが、これも大変な仕事だった。しかし、夜尿が治ってからは口も開くようになり朗らかにもなった。Ｓ子さんは初めて手芸でバンド編みをしたが、嬉しさにはしゃぎまわった。

この施設は 1955 年には沖縄実務学園女子部となり、翌年、中央児童相談所にひきつがれたが、私は指導員になった。1957 年 7 月 31 日、私の一生の思い出の「少女の家」を依願退職した。

社協で婦人・児童問題にとりくむ□■■■

主事、訪問教師、市町村係員など、20 名で構成したと記憶している。この委員会は地区社協が県社協に吸収されるまで 10 年余りつづけられ、遊び場づくり、教育隣組（部落単位に組織された子どもの健全育成のための組織）などの手引書の発行や売春問題、歩行青少年対策など、いくつかの成果をあげえたものと自負している。

地区社協当時、ずいぶんと困難な問題をかかえて苦労が絶えなかったが、地域福祉問題にとりくめたのは、福祉関係者はもちろん、市町村や教育関係者の方がたの、まさに、和の心があったと思い感謝している。

中部地区社協の事務局職員は県社協に所属していたのだが、1966 年９月、事務局長の職を新進の知花徳盛さんにひきついで、私は県社協職員の職を辞した。中部地区社協時代、ボランティア活動をするための、多くの貴重なのもをうることができた。

ボランティア活動が生活の一部□■■■